



学長就任から1年を前に

学長 鈴木 志津枝



今年度より学長に就任いたしました鈴木志津枝です。まず私自身のことを簡単に紹介させていただきます。私は、2007年10月に神戸市看護大学に療養生活看護学領域、慢性看護学分野教授、大学院看護学研究科がん看護学専攻分野担当教授として着任し、2009年より4年間、金川克子前学長の下、副学長として

大学運営に携わってきました。2013年3月に金川克子前学長が退職され、2013年4月1日に学長に就任いたしました。早いもので1年を迎えようとしています。この間、学生や保護者の方々、大学の教職員の皆様、教育活動や大学運営にご尽力くださいました皆様とともに、大学の使命を果たしているように努力してまいりました。学長就任から1年を前にして、あらためて大学の使命をかみしめ、これまでの10か月を振り返り今後に向けて思うことや課題を述べていきたいと思っています。

神戸市看護大学は1996年に開学し、今年度で18年目を迎えています。この間、大学は教育・研究・地域貢献活動を通して、看護界だけでなく地域に貢献してまいりました。今、看護系大学を取り巻く社会状況は大きく変化し、大学の使命である保健・医療・福祉に貢献できる人材育成に対する社会の要請はますます大きくなっています。変動の時代の中で、明日の社会を担っていく人材育成として、豊かな人間性と高度な専門性に加えて、起こりうる問題を予測する力や既存の枠にとらわれず新しい価値を生み出す力を育んでいくことが求められています。

私が学長に就任して以来、大学の教職員はこれまで続けてきた教育・研究活動、地域貢献活動に加えて、新たな取り組みもスタートさせてきました。大学における喫緊の課題であった、①在宅看護学専攻分野の教育内容の充実、②専門看護師教育カリキュラムの充実（26単位→38単位）と認定審査申請書類の作成、③教員の自己点検評価を目的とした「個人評価」制度の作成と次年度からの導入、④看護実践力アップのためのシミュレーション教育の基盤づくり、⑤ホームページの充実と洗練化、⑥受験生確保のための活動や広報活動の充実等に取り組んでまいりました。次年度はこれらの取り組みに加えて、大学院カリキュラムの見直しや若手教員の人材育成等に力を入れ、「成果が可視化できる大学」にしていきたいと考えています。

今年度の大学の重大ニュースの一つは、平成25年度文部科学省「地（知）の拠点事業」に大学が申請した「地域住民と共に学び、共に創るコミュニティケアの拠点づくり」事業が難関を突破して採択されたことです。この事業は、地域住

民と大学との協働作業によって地域（神戸市）の課題を解決することを目指しており、具体的には地域住民が実習・演習・講義に参加する地域連携教育（通称コラボ教育）を実施し、この活動を基盤に継続看護や訪問看護の教育の強化、多職種連携の研究や専門看護師の育成の強化、地域ネットワークの構築の支援等を行っていきます。学長のリーダーシップのもと全学をあげて取り組んでいくことが本事業では求められており、本格的な実施に向けて組織づくりや教育計画など、採択以降、地道に準備を進めています。事業期間の終了を迎える5年後を目途に、医療連携を強化できる人材や地域包括センターとの円滑化を図れる訪問看護人材の育成、コラボ教育による地域住民のネットワーク構築や地域のリーダー育成支援、地域の活性化推進の一助となるなどを実現していきたいと考えています。

さらに今年度からの新規事業ではありませんが継続的に実施している事業として、文部科学省「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」での成果をあげたいと思います。大学が神戸大学、兵庫医科大学、大阪市立大学、大阪府立大学、近畿大学、関西医科大学と共同で申請し採択された「7大学連携先端がん教育基盤創造プラン」がそれです。本事業では、地域医療に携わる看護職が連携を取りながらがん看護の活性化と質向上にむけたリーダーシップがとれる人材の養成を目指しています。その取り組みの一環として、がん看護インテンシブコースとして在宅緩和ケアコースとグリーフケアコースを開講しています。これらのコースは履修年度期間のみならず、その後のフォローアップ研修も行い、地域全体のがん看護のネットワーク構築やその運営を継続的に支援しています。今後も大学発信にて地域の看護職の人材育成やネットワーク構築に貢献していきたいと考えています。

今後も「学生、保護者の方々、教職員との対話を大切にしたい大学運営」を基本姿勢として、数々の課題に真摯に取り組むと共に、学長としてリーダーシップを発揮し必要な事業を実行していきたいと考えております。最後になりましたが、就任以来のこの11か月間、多くの人たちからご尽力を賜りましたことに感謝申し上げますと共に、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。



本学が文部科学省COC整備事業(2013年度秋から2017年度)に採択され、効果、本学発信の地域貢献のこれまでとこれからについて、特集記事とし

文部科学省 地(知)の拠点(Center of Community; COC)整備事業

石原 逸子 (地域連携教育研究センター委員長・基礎看護学分野 教授)

1. COC事業の背景と本学の取り組みについて (図1.)

平成18・9年に改正された学校教育法(第52条)、教育基本法(第7条)によると、大学の責務は、教育・研究・地域貢献である。しかし、現行の大学教育に対する批判には、①社会の問題解決に対応した教育・研究が行われていない、②学生の大学での学びが社会に出て役立っていない、③大学が組織として地域と連携できていない、等がある。文部科学省は、このような批判に応える形で大学改革プランの一つとして地域課題の解決の中核となる大学の形成を掲げ、平成25年よりCOC整備事業に着手している。この事業は、大学の地域貢献に対する意識を高め、それに係る教育研究の強化を意図したもので、地域の課題を直視してその解決にあたる大学の取り組みを支援するものである。したがって、COC事業のねらいは、地域のニーズに大学の資源(シーズ)をマッチングさせ当該ニーズに応えることであり、このプロセスにおいて大学と自治体が組織的・実質的に取り組むことを求めている。

神戸市看護大学は、平成25年度「地(知)の拠点(Center of Community; COC)整備事業」(文部科学省高等教育局大学振興課)に「地域住民と共に学び、ともに創るコミュニティケアの拠点づくり」を申請し、全国319件の申請(342大学等)中52件(56大学)の一つとして採択された。

団塊の世代が75歳以上になる2025年は、医療・介護のニーズが高まり、在宅ケア対象者が現在の約2倍に増加する。これは「2025年問題」と呼ばれ、現在神戸市の65歳以上の人口は、全国平均と同じ23.1%であるが、25年には75歳以上の人口が2倍に増えると予測されている。特に市営地下鉄敷設とともに

昭和50年代に開発された須磨区北部のニュータウンでの高齢化率は、40%を越え、オールドタウン化が進行している。さらに10～20年後には、本学が立地する西区においても同様の高齢化の状況が訪れることが予測されている(神戸市保健医療計画、平成25年、3月)。

よって、本学COC事業では、高齢化に伴う神戸市の課題となる次の4項目1)医療連携の強化、2)訪問看護人材の育成、3)地域ケアシステムの構築、4)地域住民ネットワークの構築、に対して本学のシーズを使って図1.のような内容の取り組みを行うこととした。また、カリキュラム改革として図2.にある学部・大学院の授業科目について、コラボ教育や継続看護・訪問看護教育の強化を図れるような取り組みができるようにしている。

一方、研究面では、医療や地域ケアを担う保健・医療・福祉従事者と共に本学教員が研究チームを組織し、地域住民のケアとその仕組みを支える多職種間ネットワーク機能に関する研究の実施をこの事業の枠組で支援していく。

2. 期待される事業の効果について

本事業は、文科省から採択された翌月平成25年度9月から開始し、補助金交付の終了する平成29年度末までの5年度にわたる事業である。実施期間中の平成27年度末に中間評価を受け、さらに最終年度の平成29年度末には最終事業評価を行う。これら第三者評価とともに、常時、自己点検自己評価の視点を大切に事業に取り組みたい。

現在予測している本事業の効果は、以下のとおりである。

- 1) 地域で看護を実践していく視点を持った卒業生を輩出し、他職種間医療連携を強化できる人材を育成する。
- 2) 訪問看護への志向性の高い卒業生を輩出し、地域包括支援システムの円滑化を図る訪問看護人材を育成する。

図2.

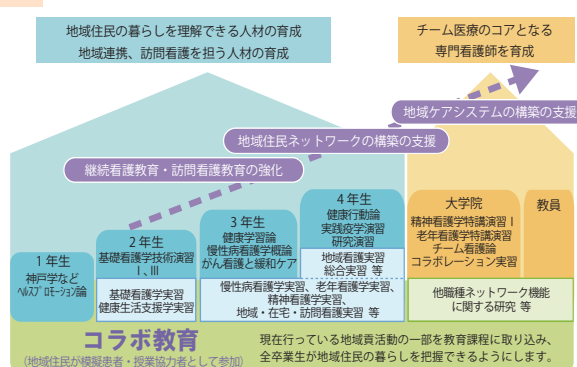
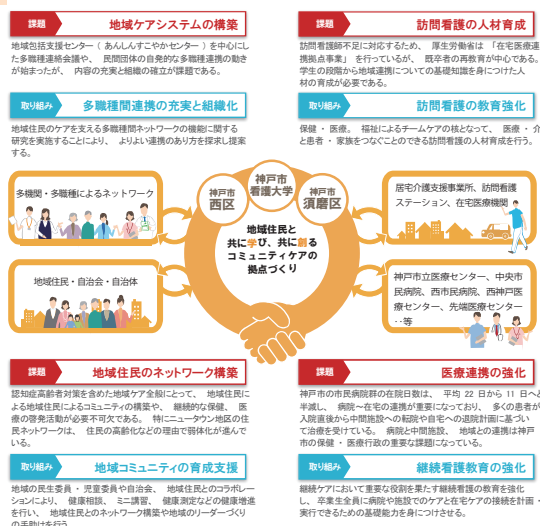


図1.



COC整備事業に選ばれました

新しい取り組みが始まります。今号では、その目指すところ、期待される
てお知らせいたします。

- 3) 地域ケアシステムの構築についてより良い連携の在り方を
提案
- 4) 「コラボ教育」により地域住民のネットワーク構築や地域の
リーダー育成をサポートし、地域の活性化の一助となる。
- 5) 学長を中心とした全学的な取り組みにより、大学運営の機
動性を向上させる。

以上、本学COC事業について概要を紹介した。現在、平成
26年度からの本格的な取り組みに向けての準備中である。平
成26年3月には、本学の取り組みを地域住民の方々及び神戸
市須磨区や西区の保健・医療・福祉職の方々に広く知って
いただき、今後より一層連携の機運を高めることを目的とした
COC事業のキックオフシンポジウムを行う予定である。

発展進化する本学の地域貢献

～これまでの地域貢献活動から COC「コラボ教育」へ～

都筑 千景（地域連携運営委員会委員長 地域・在宅看護学分野 教授）

神戸市看護大学では、これまで大学の使命である教育・研究
に加えて、地域貢献活動にも積極的に取り組んできました。阪
神・淡路大震災の翌年である平成8年に「地域社会の保健・医
療・福祉に貢献できる看護専門職者の育成」を教育理念の一つ
として掲げ、本学は開学しましたが、以来さまざまな形で地域
貢献をおこなっています。特に、大学の立地する神戸市西区と
の連携・協働を進めており、平成18年に文部科学省の現代GP
(Good Practice)「地元住民と共に学び共に創る健康生活」(実
施期間H.18～20年度)が採択されたことを契機に、西区との
連携協定も締結しました。それ以後、区や地域とのかかわりが
以前よりも構造的・機能的にパワーアップしてきた経緯があり
ます。現代GP終了後の平成21年度より、地域連携・地域貢献
活動の拠点として学内に地域連携・国際交流センター（COC事
業実施に伴い地域連携教育・研究センターと改称）、通称：コ
ラボセンターを設置し、教職員が力を合わせ、さまざまな活動
を全学的に展開しています。

そして今年、地（知）の拠点整備事業（Center of
Community）として本学提案の事業「地域住民と共に学び、共
に創るコミュニティケアの拠点づくり」が採択されました。看
護系単科大学としては2件のみ！という狭き門をくぐることが
できました。このCOC事業は、これまで本学が取り組んできた
地域貢献活動がベースになっています。これらの活動を今回の
枠組では、「コラボ教育」として学生のカリキュラムに取り入
れていきます（図2）。「コラボ教育」は今回のCOC事業を支
えるカリキュラム改革の柱として位置づけられており、すべての
学生が地域や住民の暮らしを理解し、また地域課題の解決に
貢献できる、そんな看護専門職の育成を目標に取り組んでいき
たいと考えています。

現在行っているコラボセンターの活動のひとつに、地域の
の方々による「教育ボランティア」を導入した授業があります。
この授業は、地域の方々に教育ボランティアとして大学の授業
に参加いただき、生活の様子や健康への取り組みなどをお話し
いただいたり、模擬的に患者役になっていただいたりするもの

で、現在、学部・大学院において8科目、1実習に導入されて
います。この授業を体験した学生は、普通の授業では学べない
リアリティのある学びやイメージが得られており、具体的援助
方法の理解やより実践的なコミュニケーションの会得等、看護
職としての学習に大いに役立っています。また、参加された地
域の方々からは、社会参加や若者（学生）との交流の機会とな
る、などの感想が聞かれており、学生と地域の方々双方によい
結果をもたらしています。今後、この教育ボランティア導入授
業をCOC事業を機に「コラボ教育」としてさらに発展させ、
学年進行に合わせて段階的、系統的にカリキュラムに導入して
いくこと、また地域の方々に大学に来ていただくのではなく、
住民の方々の暮らしの場である地域に学生と教員が出向き、地
域の場で教育活動を展開していくことを予定しています。

これまでのコラボセンターの活動として継続的に実施し主要
な活動となっている事業に「まちの保健室」がありますが、こ
こでの「健康支援活動」、「もの忘れ看護相談」、「こころと身体
の看護相談」においても、積極的に「コラボ教育」を導入し
ていきます。このように本学の地域貢献活動を新たにCOC事
業の枠組で「コラボ教育」として実施していくことにより、須
磨区・西区の地域課題の解決に向けて、地域の方々の暮らしや
生活を理解できる看護職の育成を推進し、一方で学生のパワー
による地域の活性化につなげていきたいと思っています。さら
に新たな地域貢献活動として、COCシンポジウムやフォー
ラム、地域の方々向けの公開講座などの企画を検討しています。
もちろん、従来からのコラボセンターの活動である「コラボカ
フェ」、「まちの保健室」、「子育て支援（すこやかクラブ）」、「看
護専門職公開講座」、「命の感動体験」、地域団体への「出前健康
講座」等、COC事業以外の地域貢献活動も変わらずに実施して
いく予定です。これらの活動を通じて、本学がこの地域におけ
る地（知）の拠点として、より地域に根差した、地域に貢献で
きる大学となれるよう努めていきたいと思っています。みなさ
まのご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

国際学会参加報告『第28回国際アルツハイマー病学会』に参加して

坪井 桂子（老年看護学分野 准教授）

2013年4月18日から20日まで台北で開催されたThe 28th Annual Congress of Alzheimer's Disease International（第28回国際アルツハイマー病学会）に老年看護学分野の沼本教子教授、清水昌美助教と参加しました。学会は各国から認知症と共に生きる当事者、家族、家族会の方々が参加し、当事者の目線で企画・運営されていました。世界各地の認知症の方や家族の方が参加している様子を目の当たりにし、当事者の立場に立った研究に取り組む意義を改めて認識しました。また、他国の研究者や専門家と交流する中で、日本が世界に先駆け高齢社会を迎えていることから日本の認知症ケアについても非常に注目されていることを感じました。

私達は、Regional Support for the Elderly with Dementia and Their Families Based on "Nurse Consultation on Memory Loss"（「もの忘れ看護相談」における相談内容とその対応の現状からみた地域で認知症高齢者と家族を支える方略の検討）について報告しました。看護相談の事例を分析し、認知症高齢者を地域で支える方略として、「家族の不安を軽減するために認知症に関する基礎的な知識を普及させること、不安に思った時に相談できるしくみづくりの必要性」を報告しました。研究成果については、台湾、シンガポール等各国の研究者のみならず、オーストラリア、台湾の家族会の方、台湾の建築家の方等、幅広

い立場の方と意見交換ができました。また、大学教員が教育や研究等の本務と並行して「もの忘れ看護相談」をボランティアとして企画・運営するための工夫点、研究としての独創性を高めるためのアドバイスを頂きました。講演では、世界の認知症ケアの最新の動向、私達の取り組んでいる「もの忘れ看護相談」に関する実践・研究の位置づけを確認し、今後の実践・研究活動に活かすべき多くの知見を得ました。特に、認知症のケアの質が向上するためには、看護、介護だけでなく、社会の人々との連携・協働が欠かせず、認知症や家族の方が利用するすべての社会資源に専門職は働きかけることが重要であるという報告が印象に残りました。

3日間の短い期間ではありましたが、参加者の人々との交流を通じて、教育・研究者として、認知症ケアへのさらなる取り組み、ケアモデルの開発など果たすべき役割が多くあることを実感した学びの機会となりました。



ポスター発表会場にて
左から沼本教授、清水助教、筆者

国際学会参加報告：『世界看護科学学会』に参加して

岩本 里織（地域・在宅看護学分野 准教授）

「世界看護科学学会 第3回 学術集会」が韓国看護科学学会 第9回国際学術集会との共同開催にて2013年10月18日韓国ソウルで開催され、参加しました。世界看護科学学会は、看護の国際学術交流ならびに共同研究を促進することを通して世界の人々の健康と福祉に貢献することを目的とした、国を超えた新たな看護の国際学会です。第1回の学会は、神戸の地で2009年に開催されています。

この学会のテーマは「Care for Vulnerable Populations: Global Perspectives」（世界的な見地からの脆弱な人々に対するケア）をテーマにしており、地域看護学を専門とする私は、大変関心のある内容でした。参加者は韓国の方が多いですが、半数近くが日本人のように思えました。

基調講演には、カリフォルニア大学のAdeline Nyamathi教授から、「Creating Culturally-Relevant and Sustainable Research Strategies to Meet the Needs of Vulnerable Populations（脆弱な集団のニーズを満たすために文化的に適切で持続可能な研究戦略）」というテーマで講演がありました。演者がインドにおいて、CBPR（Community-based participatory research）の理論を用いて、コミュニティとパー

トナーシップを構築しながら、農村部における女性のHIV/AIDSのリスクを下げるための支援を行っている研究について紹介されました。また日本からは招待講演として慶応大学の太田喜久子教授による「日本における高齢化社会における認知症高齢者への看護支援」をテーマとした講演が行われ、日本の取り組みが紹介されました。そのほか、多くの参加者からのプレゼンテーションがあり、熱心な情報交換・議論が行なわれました。世界各国において、HIV感染、ホームレス、虐待、貧困などの社会的に不利な状況に置かれている人々への支援に着目されています。日本においても同様です。これらの問題は、個々への支援ではなくコミュニティを巻き込んだ支援が必要であることを再確認しました。また、韓国・日本の研究者との交流や、学会後には韓国の食文化も堪能し、有意義な学会参加となりました。



学会開催風景と筆者（右）



神戸から世界各地へ

JICA 草の根技術協力事業「病院内の体系的な看護師教育プログラム導入プロジェクト」の報告 ーフィジカルアセスメントの研修をおえてー

内 正子（小児看護学分野 准教授）

本事業は、ベトナムダナン市にあるダナン産婦人科小児科病院の看護師の知識・技術の向上を目標に、神戸国際協力交流センターと西市民病院、本学が協力して、2012年4月から3年間に亘って取り組んでいる事業です。

2年目にあたる2013年7月に、ダナン病院から第3回研修員として6名の看護師長が来日され、フィジカルアセスメント（呼吸）の研修を西市民病院と本学で受けられました。私は「小児におけるフィジカルアセスメント・呼吸」を担当しました。アセスメントを行う際の留意点として、小児に協力してもらえ環境を整えること、家族から情報収集すること等を説明しました。ダナン病院の新人看護師は、小児からの情報収集は困難なので、情報収集しない（家族からも収集しない）ということが課題にあがっていました。私が研修前にダナン病院に視察に行った際に、日本とは異なり常に小児の側に家族がいる光景を目にし、それらを活かした援助を考える必要があると思いました。本学での研修後半は、フィジカルイグザミネーションについて器具を用いながら説明しました。また、喘息の事例を用いてロールプレイをみてもらい、気がついたことを意見してもらいました。ダナン病院でも喘息をもつ小児は多く、活発な意見交換ができ、研修生の知識や経験が豊富であることに感心しました。

7月の研修の評価、教育プログラムの進捗状況などを確認するために、10月にダナン病院に派遣されました。新人看護師

対象のフィジカルアセスメント（呼吸）の研修を視察しましたが、来日した研修生6名が分担して講師になり、講義やロールプレイを実施していました。看護師が看護師を教育するということはこれまでなかったことであり、研修の内容や資料作り等も初めてという状況でしたが、とても分かりやすく話されていました。今までは医師だけが聴診器を使用していましたが、あらたに聴診器を使用するようになった新人看護師も適切に使用し、コミュニケーションをとりながらアセスメントに必要な情報を収集していました。現地での研修視察後の協議で病院幹部は研修生の努力を認めておられました。日々の実践においても、新人が情報をメモして医師に伝えることができてきた、知識・技術両面での向上が自分たちにも可能だと意識できるようになった、看護の役割が明確になってきたと話されていました。日本で研修を受けることにより看護師教育の重要性に理解が深まったようです。

最終年度を迎える本事業の残りの期間を、ダナン病院独自の看護師教育プログラムに活かせる研修内容を提供することでさらに効果的な支援を盛り込んでいきたいと考えています。



フィジカルアセスメント研修中
本学にて

将来の看護師像を思い描いた海外研修（学生海外研修報告）

菊地 慶子（地域・在宅看護学分野 助教）

本学の海外研修プログラム「米国・シアトル看護学研修」へ2013年3月16日～3月30日の15日間、学部1年生17名、2年生2名、編入3年生3名、合計22名の学生が参加しました。今回は3回目の海外研修でしたが、ワシントン大学との学術協定締結後、初めての研修でした。スケジュールの構成としては、午前中は主にワシントン大学内での座学で、午後から訪問する施設概要やアメリカの医療・福祉制度の講義を聴き、さらに医学英語や英会話のレッスンを受けました。訪問施設は、ワシントン大学の関連医療施設をはじめ、こども病院、地域医療を担う施設、がん専門相談施設等で、そこでは最先端の医療技術は勿論のこと、患者・利用者の状況に応じて医療や福祉サービスが提供されていました。施設概要や各施設の医療や看護の特色について通訳を介して現地スタッフから説明があり、例えば、医療保険の加入の有無によって受けられる医療サービスに差があるなど日本とは異なるアメリカの医療事情を具体的に理解することができました。さらに医療や看護が提供されている現場を見学し、スタッフの方々との質疑応答の場では、利用状況やスタッフの役割などのとらえ方を伺い、人を労わる気持ちは世界共通であることを感じることができました。また、心拍数や心音、呼吸数・リズム、肺音などをコンピューター制御された

患者人形に対して学生は実技体験をし、患者を診る側である自身の感度を研ぎ澄ませる努力を持続することが医療職に求められると認識できたようです。

研修期間中、学生は1～2名でホームステイをしました。ほとんどの学生は海外渡航が初めてであり、慣れない環境に最初は戸惑っておりましたが、現地の方と毎日接している中で英語によるコミュニケーションを図る必要性に迫られ、日々英語力が上達し、特にヒアリング力は向上したようです。今回の研修を通して『日本の医療状況を詳しく知りたい』と発言する学生がおり、医療や看護に関して国際的な見地から学びを深め、今回の研修を生かして日本の医療活動に貢献してくれるのではないかと期待しております。



Northwest Hospital Education & Simulation
Center にて

在学生から

私のもう一つの故郷・福貴浦

長山 瑞季（1年在学中）

私は昨年夏休みにピースボートというボランティア団体の「イマ、ココプロジェクト」というものに参加し、東北・宮城県に漁業ボランティアに行ってきました。このプロジェクトはボランティアが労働力を提供する代わりに、現地の漁師さんが寝所と食事を提供してくれるという新しい形のボランティア活動といえます。

今回は宮城県石巻市の福貴浦というところに行かせてもらいました。ここは牡蠣の養殖が盛んな地域ですが、3月11日の東日本大震災では津波の大きな被害を受けた地域でもあります。

作業内容は牡蠣に付いたゴミを取ったり、大きさを仕分けたりしました。しかし、浜の牡蠣の出荷作業場が地震の津波で流されてしまったので、かごの上に板を乗せ手作りの作業場で行いました。作業をしていると仕事のあいている漁師さんが次々と私たちのところに来て、たくさん話をしてくれたのがとても嬉しかったです。みなさん明るくて優しく楽しい人ばかりでした。

1週間滞在型のボランティアだったので、震災当時避難所にもなった福貴浦会館というところで私たちは生活しました。私は大学の友人と2人で行ったのですが、会館では同じボランティア仲間と5人で共同生活を送りました。出身地や年齢はバラバラでしたが1週間共に過ごし、今ではかけがえのない仲間になりました。

また仮説住宅も訪問させていただきました。その日はオリンピックの東京開催が決まった日で、テレビでも報道されていま

した。そのことについて尋ねると「嬉しい気持ちもあるけど、実際はそんなに私たちに関係ないの。それよりみんなお祭りに夢中になって私たちが忘れられないか心配。」とおっしゃいました。実際に福貴浦の道路の工事を中断し、オリンピックの選手村の工事に行ってしまった会社もあると聞き、とてもショックを受けました。

その他にも私がこのボランティアを通じて感じたことはたくさんあります。まず復興はまだ途中ですが、被災地の人たちの心は確実に前を向き始めているということです。昨年の8月9日に起こった岩手の水害でボランティアにいった漁師さんもいました。「俺達はもう助けてもらうだけの被災者じゃない！」という言葉がとても力強く印象的でした。

そして私にとって自分のことのように考えられる故郷が増えたということがとても幸せです。「5年後、10年後に子どもを連れてまた遊びにきてほしい。」といってくれた人もいて、ボランティアをしにいったのに逆に私が元気をもらって帰ってきてしまいました。本当に人の温かさを感じた1週間でした。すべての出会いに感謝しています。

この文章が、皆さんがもう一度被災地について考えてくれるきっかけになればいいと思います。



宮城県石巻市福貴浦にて
左から2人目が筆者

卒業生から

こんな仕事をしています！ ～困窮者総合支援室 Hippo.（ひぽ）～

吉村 友美（第12回編入・卒業生）

私は2011年に神戸市看護大学を卒業後、大阪市西成区にある「あいりん地区（通称 釜ヶ崎）」で働いています。日本一の高層ビル「あべのハルカス」がある繁華街から5～10分ほど歩くと、今なお500名以上の人々が野宿生活をおくる釜ヶ崎があります。

高度成長期の釜ヶ崎は、日本最大の寄せ場として日本の建築産業を支えてきた「労働者の街」でした。しかし景気低迷による寄せ場機能の衰退や、労働者の高齢化などにより、多くの方々が野宿生活をせざるを得ない状況になりました。

私が勤めている「困窮者総合相談支援室 Hippo.（ひぽ）」では、野宿生活から脱出したあとも、再び野宿に戻ることがないように、いろんな方法で生活基盤を支えています。

現在 Hippo. で関わっている相談者は232名で、ほとんどが単身男性です。年齢層は31歳から84歳まで幅広く、全員に共通していることは「人生で野宿を経験せざるを得ないほど困窮した時期がある」ということです。業務内容は健康状態の把握、衣食住の確保、通院・入退院の調整、金銭の管理、借金の整理、福祉サービスの申請、仕事探し・・・など多岐にわたります。業務のほとんどが、看護基礎教育では学ばない事柄です。困難を抱えた人々が地域で生活を送るための基盤作りには、既存制度の隙間を埋めたり、これらの人々と制度内外の支援機関とのつながりをつくり、支援する側も連携を取り合える Hippo. のような場所が必要だと感じます。

私が釜ヶ崎に来るようになったのは2008年の秋です。当時、多くの派遣労働者が大量解雇され、住居を失う人々の様子が連日報道されていました。不安定な雇用で頼らざるを得ない人々

は、生活基盤も脆弱であり、いったん生活の基盤を失うと、底なし沼にはまりこんでしまったかのようにどこまでも沈み落ちていく印象を受けました。どうすればこれらの人々が安定した生活を手に入れて生き抜くことができるのだろうか。医療や福祉の支援は過不足なく確実に届いているのだろうか。いろんな疑問が出てくるのですが、まずは現場を知ることが必要だと考え、釜ヶ崎に足を踏み入れることにしました。

この地域に関わるようになって5年になりました。さまざまな困難を抱えた相談者でも、良質な支援体制が整えば「なんとかなる」ことが多いという実感を持つようになりました。現在 Hippo. では、訪問看護ステーションの立ち上げに向けて準備をしているところです。生活基盤を再構築しながら、健康的に地域で暮らしていくためには、さまざまなサポートが必要ですが、その一端を看護が担うことの意味はとても大きいと思っています。困窮状態に陥っても人生を諦めることなく、少しでもその人の生活がイキイキと動き出すような、その土台部分を一緒に支えていけたらと思っています。



支援室の前で

Hippo. では少しでも多くの方に釜ヶ崎の現状を知っていただくために、地区案内やボランティア活動を受け付けています。関心のある方は以下まで連絡をください。

一般社団法人 困窮者総合相談支援室 Hippo.（ひぽ）
大阪市西成区萩之茶屋1-2-15 コミュニティハウス萩1B
ホームページ <http://www.hippo.or.jp/>
Mail: hippo@hippo.or.jp Tel.06-6636-7885

研究現場から

医療と日常の混交として 「在宅療養の文化」を探求する、新しい社会学

梶田 美雄（社会福祉学分野 准教授）

「在宅療養の文化」は、医療と生活が総合されてできあがりつつある、日本の新しい文化である。人口密度の高い日本では、訪問診療・訪問看護を効率的に行うことができるので、この文化は、介護保険後の日本に特徴的な文化として顕現しつつある。たとえば、在宅療養の現場では、以下のようなことが起きているのではないだろうか。第一に、医療者やヘルパーの振る舞いが家庭内での話題になる。第二に、療養者と家族の日常や非日常の在り方が、専門職訪問者（医師・看護師等々）の医療的関心事になる。つまり、「医療と日常生活の相互規定的混交」が、起きてきているのではないだろうか。

この起きていることの全体を「在宅療養の文化のハイブリッド（異種混交）性についての研究」として把握していきたい。つまり、在宅で起きていることを、医療的なものと日常生活的なものの両方が、複雑に混交してお互いを変化させつつあるものとして考え、それを探求していきたい。

例えば私は、現在、あるALS（筋萎縮性側索硬化症）の患者さん宅に、3年越しでフィールドワークに入っているが、そこでは、患者さんと家族の話題の中心的部分のひとつが、訪問してくる専門職たちの吸引技術であった。すなわち、ALS患者は、呼吸筋が衰えるため、ある程度病状が進行すると一日に数十回の痰の吸

引が必要となるが、その一見医療的処置にのみ見える作業が、単に生きるための生物医学的作業としてのみ扱われるのではなく、「片手でぞんざいだが、うまい」とか「両手で丁寧で基本通りだが、それほどうまくはない」とか、さらには「吸引の準備段階での体位の変換の手際がよく、かつ、観察力も優れていて、気管支のなかのどの部分に痰があるのかの見極めが適確で総合的に優れている。しかも、無理をしないところがいい」というような形で、ほとんど文化的に批評する対象ともなっていたのである。また、ぎゃくに、医療者側が患者の日常から強く影響されることもあった。たとえば、患者の暮らしを支援する中で、旅行の重要性が見えてきたため、在宅療養クリニックの将来計画に、旅行代理店的機能を組み込むことが検討課題となっていく、というようなことが起きてきているのである。つまりは、療養者の日常生活と医療が相互的に入れ子になって、影響を与えあっているのである。この状況は、医療的状况というより、社会的状況である。この新しい状況を探求する新しい社会学を作っていきたいと願っている。



ALS患者の吸引場面

大学の1年間

行事 *****

2013年 4月8日	入学式
4月10日	定期健康診断
7月18日	大学院特別講義「尺度開発の実際 開発プロセスと尺度に求められる要件」
8月3日～4日	オープンキャンパス
8月29日	大学院博士前期・後期課程入学試験（9月4日合格発表）
9月6日	編入学試験（9月18日合格発表）
9月26日	助産学専攻科特別講演会「昭和の助産・これからの助産～真実に寄り添う～」
10月12日	助産学専攻科入学試験（10月24日合格発表）
11月2日	あざみ祭
11月4日	第15回国際フォーラム「臨床看護におけるシミュレーション」
11月16日	推薦入学試験（11月28日合格発表）
11月23日	看護専門職公開講座「ひろがる災害看護」
12月2日	大学院特別講演会「Ethnography: An Excellent Research Method for Nursing」
12月19日	特別講演会「認知症高齢者とその家族の人権を守る」
2014年 1月18日～19日	大学入試センター試験
2月25日	一般選抜入学試験前期日程（3月6日合格発表）
3月1日	大学院オープンキャンパス
3月12日	一般選抜入学試験後期日程（3月20日合格発表）
3月14日	卒業式

人 事 *****

教 員

退 職

2012年	8月31日	吉 金	岡 川	隆 克	之 子	准 教 授
2013年	3月31日	笠 松	松 村	洋 徹	学 長	授
	3月31日	紙 越	栄 由	紀 子	准 教 授	
	3月31日	川 坂	加 代	美 枝	准 教 授	
	3月31日	鯉 原	睦 捺	子 桜	助 教	
	3月31日	益 栗	原 木	千 裕	助 教	
	3月31日	合 鈴	谷 川	子 桜	助 教	
	3月31日	谷 藤			助 教	

採 用

2013年	4月1日	樫 田	美 雄	准 教 授
	4月1日	加 藤	憲 司	准 教 授
	4月1日	江 口	由 佳	助 教
	4月1日	小 池	香 織	助 教
	4月1日	谷 川	千 佳	助 教
	4月1日	西 山	忠 博	助 教
	4月1日	春 名	寛 香	助 教
	4月1日	平 野	通 直	助 教
	4月1日	堀 田	孝 子	助 教
	4月1日	宮 下	ル リ	助 教
	4月1日	八 木	哉 子	助 教

昇 任

2012年	10月1日	高 山	良 子	講 師
2013年	4月1日	池 田	清 子	授

役職兼務

2013年	4月1日	鈴 木	志津枝	学 長
	4月1日	二 宮	啓 子	副 学 長
	4月1日	石 原	逸 子	学 生 部 長
	4月1日	松 葉	祥 一	図 書 館 長

職 員

退 職

2013年	3月31日	栗 田	朋 子	学 務 係 長
	3月31日	辻 垣	和 子	事 務 職 員

転 入

2013年	4月1日	森 田	文 明	事 務 局 長
	4月1日	西 川	祥 子	学 務 係 長
	4月23日	岡 崎	健 一 郎	事 務 職 員
	4月23日	丹 羽	央 央	事 務 職 員
	4月23日	乾	和 人	事 務 職 員

転 出

2013年	4月1日	三 木	真 人	事 務 局 長
	4月23日	野 間	勉 志	事 務 職 員
	4月23日	大 黒	高 志	事 務 職 員

平成24年度国家試験合格状況

	保健師	看護師	助産師
受験者数	108名	75名	13名
合格者数	108名	75名	13名
合格 率	100%	100%	100%

平成24年度学部卒業生・大学院修了生

学 部 卒 業 生	108名
助産学専攻科修了生	13名
大学院修士課程修了生	10名
大学院博士課程修了生	1名

平成25年度入学生

学 部 1 年 次	94名
学 部 3 年 次 編 入	10名
大 学 院 修 士 課 程	14名
大 学 院 博 士 課 程	6名
助 産 学 専 攻 科	15名

オープンキャンパス 予告

2014年度のオープンキャンパスは2014年8月2日(土)、3日(日)に実施予定です。本学入学をお考えの方をご存じでしたらどうぞお声をおかけ下さい。詳細は順次本学HPなどに掲載いたします。

編集後記

「回廊」第11号をお届けします。毎年のように異常気象が話題になりますが、この冬も関西地方では珍しく都心でも雪景色をみる冬となりました。さて、本学では、4月就任の新学長のリーダーシップの下、これまでも地道に積み重ねてきた地域との連携を柱にした教育研究地域貢献活動がCOC事業としてさらに発展していく機会を得ることになりました。今号の特集記事は、COC事業についてです。大学に課せられた社会的使命を果たし、これを基盤になお一層、教育・研究の幹を太くし、自由にのびのびと枝を拡げ看護学発展の一端を本学が担っていることを今後もお伝えして行きたいと思っております。(広報委員会)

神戸市看護大学

〒651-2103 神戸市西区学園西町3丁目4番地
電話：078 (794) 8080 (代表) FAX：078 (794) 8086
E-mail：madoguchi@tr.kobe-ccn.ac.jp Web：http://www.kobe-ccn.ac.jp